



先代住職故今岡正道上人

善照寺
寺報

ぜんしょうじ

第2号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺
電話 四七(三五七)一三三三
FAX 〇四七(三九七)一三三二

暑さ寒さも彼岸まで・・・

善照寺住職 今岡達雄

早春の候、皆様方にはご清祥のこととお慶び申し上げます。

この季節になりますと、表題にもありますように「暑さ寒さも彼岸まで」という語句が盛んに使われます。寺報創刊号の評判が思いのほか良かったので、お彼岸に合わせて寺報第2号を発行することにしました。

本年は、先代住職（昭和五十五年四月十六日寂）の二十三回忌をむかえます。この四月十四日に寺院方、寺役員、近親者で二十三回忌法要を行う予定にしています。

考えてみますと、私が住職になつてからもう二十年以上になつていくわけです。これまでやってこられたのは、先代住職の導きがあつたの事と思えます。加えて檀信徒の皆様方の暖かい支援があったからと感謝しています。今後とも宜しくお願い申し上げます。

合掌



お彼岸【おひがん】

彼岸は、春分（秋分）の日を中日として、その前後にわたる一週間。日本に特有の習慣で、みなさまご存じのとおり、お墓参りをします。

彼岸とはもともと、「迷いの現実世界」をひとつの川岸にたとえ、ここから「悟りの理想の世界」というもうひとつの岸へわたるといふこと。昔のインドのことでパーラミターといひ、中国人は波羅蜜多と音訳しました。

悟りの世界へわたるには、善い行いをしなければいけません。それが「六波羅蜜」といふ六つの修行です。

布施【ふせ】他人に物品や善

行をめぐみほどこす。

持戒【じかい】規律や約束ごとを守つて生活する。

忍辱【にんにく】苦しみを耐えしのび、受け入れる。

精進【しょうじん】これらの修行をながく続ける。

禅定【ぜんじょう】これらの修行によつて、ゆるぎない心の静けさがたもたれる。

智慧【ちえ】その心から、さと（智慧）が生まれる。

けつこう難しいものです。こつた修行ができませんければ、この迷いの世界をさまようしかないはず。ところが南無阿彌陀仏のお念仏を一心に続ける中に、これらの六つがすべてこめられているというのが、浄土宗のおしえです。

お日さまが真西にせずお彼岸。西には阿彌陀仏の極楽浄土があります。なぜお日さまの沈む西なのか、考えてみるのもいいかもしれませんね。

住職法話

俱會一處

「俱會一處（俱会一処）」とは阿弥陀経の中にある言葉です。その部分を現代語に翻訳しますと次のようになります。

「舍利弗よ阿弥陀如来の浄土に生まれた者は、みな佛になることができる。その多くは最高の菩薩でありその数は大変多い。舍利弗よ、聞ける者供よ、極楽浄土に生まれたいという願いをおこすべきである。それは何故かという、西方極楽浄土ではこのような善き人々と、**とも一処に会うこと**が出来るからである。」

つまり「自分より先に亡くなった方々は阿弥陀さまによって極楽浄土に迎えられ、極楽浄土で修行をして佛になります。中には菩薩様のような偉い佛様

もおられます。そのような善き人々（佛）と会うことが出来るのだから極楽を目指すべきです」という意味になります。

仏教学者の中村元氏の解説によれば「この俱会一処の思想は、浄土願生者の宗教意識を高めるに与って力があつた。父

墓地の片隅にある江戸時代の

墓石をみますと、夫婦の戒名が刻まれたその上に「俱会」とか「一蓮」とかがくつきりと刻まれています。また戒名の下には「一處」とか「託生」と書かれています。

「一處」とか「託生」と書かれています。俱会一処、一蓮托生のこと、いずれも愛別離苦の

近親者の「死」に向かい合う者

にとつては愛別離苦の悲しみは当面乗り越えるべき重大事であります。「俱会一処」はその方法を教えてくれます。

お釈迦様がおっしゃっているように、この世の生は苦であること。今まさに直面しているのが愛別離苦という苦であること。しかし、阿弥陀様の国、極

楽浄土に行きたいと願う阿弥陀様にお願ひすれば、必ず阿弥陀様に迎えられて浄土に往生できること。そこで、佛に会い、菩薩に会い、善き人に出会い、先亡の仏になった人々に出会うことが出来ること。

そして、残された我々が何時しか浄土に迎えられるとき、今日の仏が必ず我々を迎えてくれること。そのときが来るまでしっかりと世の中を見定め、極楽往生を願って念仏に精進すること。これが「俱会一処」の意味するところだ。

（住職 進誉達雄）



子・兄弟・夫婦が再び浄土において同じ縁を結びたいと、愛別離苦のかなしみを超えて同一念仏の信心に生きた人々の浄土往生史を緝ひもとげば、この間の事情を知ることが出来よう。」と記されています。

かなしみを超えて、父子・兄弟・夫婦が再び浄土において同じ縁を結びたいと念仏に深く帰依した証を見て取れます。

さて、私たちの日常に立ち返ってみますと、「死」は非日常的な事柄であります。しかし

念仏の馬八

馬八は不信心者だった。

親父やお袋が死んだときは、人前では涙ひとつこぼさず、男気を見せたが、家ではちっぽけな仏壇の前で泣いた。

ただそれは、自分が悲しいから泣いただけだ。仏壇には阿彌陀様の古ぼけた像があったが、馬八の目には入りやしない。南無阿彌陀仏だって一回もとなえない、不信心者の馬八だった。

そんな馬八が嫁をもらった。人より遅い結婚だったから、親父もお袋もこの世にいなかったが、馬八はたいそう喜んだ。

嫁のタネは信心者の家に育ったが、念仏のことはよくわかっていない女だった。ただ、親が仏壇に向かって南無阿彌陀仏と手を合わせるのを見て育った。だから自分も仏壇に手を合わせ、それだけだ。

タネは馬八のちっぽけな仏壇をきれいにしてやった。古ぼけた阿彌陀様の像も、きれいにふいてやった。それでも古い仏像はさえないままだったが、阿彌陀様も少しは喜んだらうヨ。

馬八は、そんなタネを横目に見ていたが、あいかわらずの不信心者で、タネが手入れした仏壇に手も合わせなかつた。ただ、嫁のためには汗水流して働いた。

そんなタネの腹に子が授かったとき、馬八は喜んだモンだ。タネは仏壇に向かって、阿彌陀様にありがとう、南無阿彌陀仏と拝んだ。そのとき馬八もチヨコットだけ、南無阿彌陀仏と拝んでみた。照れくさかつた。だから馬八は拝むのが嫌なソだな。ところがこの世は何が起こるか、わかつたモンじゃない。タ

仏さまからの手紙

ネの腹の子は育たなかつた。それはいくら馬八が汗水流しても、ろくな食べ物のない時代だから、しかたがなかつた。

馬八は阿彌陀様をうらんだ。不信心者の馬八に戻って、うらんだ。汗水流して働いた自分をこんな目に合わせる阿彌陀様を、うらんだ。

ところがタネはちがつた。生まれなかつたわが子のために、必死の形相で念仏した。タネは念仏のことなど何もわかつちやいない。ただ、わが子を極楽に連れて行ってくれヨと、阿彌陀様をお願いした。

タネにとつて、自分の腹にいたこの子は、自分より大切なものだった。身のまわりのことも忘れて、念仏ばかりした。ほかのことをするのが不安だった。それを見ていた馬八は、いつしかタネと並んで、一緒に念仏するようになつた。野良に出ているときも、口につぶやくつづけた。ナンダカンダ言つて馬八も、生まれてこなかつたわが子

の代わりに、何かしてやりたかつたソだ。

念仏なんて、何の役にも立ちやしない。タネはそれから二度と子をはらまなかつた。二人の仏壇には、坊さんに作つてもらつて、小さな位牌が座つていゝ。今じゃ朝夕そろつて念仏するの、二人の日課だ。

二人の顔はずいぶんおだやかになつた。馬八も不思議と、あの子のことがもう心配でなかつた。そう、阿彌陀様があの子をいい所に連れてつてくれるつてことが、もう良くわかつていたソだ。あの子のことを阿彌陀様におまかせできたソだ。

それだけじゃない。自分より大切なわが子を阿彌陀様におまかせできたくらいだ。馬八もタネも、何だか心やすく毎日を過ごしている。それは、念仏のことなんか何もわかつちやいない二人だけど、自分のことも阿彌陀様におまかせできたからだ。不信心者の馬八が、今じゃ毎日念仏している。

(副任職 聲譽達彦)

お寺とインターネット

善照寺ではインターネットにホームページを開いています。

「バーチャル寺院：善照寺」です。新旧有りますが、写真は新HPです。歴史的な旧HPも生きています。是非一度ご覧になつて下さい。

今回、善照寺ホームページを紹介したのは、善照寺の檀信徒の皆様方でインターネットにアクセスできる方がどのくらいいらっしゃるかを調べたからです。

実は最近、法事の予約、卒塔婆の施主名がメールで届きました



(newHP) <http://www.zenshoji.or.jp/>

(oldHP) <http://www.bekkoame.ne.jp/~imaoka/>

mail: imaoka@bekkoame.ne.jp

た。「世の中変わったな！」と本当に感激してしまいました。電話でお知らせいただくより確実ですし便利です。

というわけで、皆様のお宅でインターネットのメールアドレスをお持ちの方がどのくらいいらっしゃるかを調べたくなつたわけです。一家の中の誰でも結構です。メールのアドレスをお持ちの方は住職のメールアドレス宛にメール下さい。パソコンか携帯電話かの区別もお知らせいただければ幸いです。

(住職拝)

事業報告



・煩惱は消えた？ 除夜の鐘

(十二月三十一日)

多くの方が鐘つきに見えました。お手伝い下さった慧日会の皆様、ありがとうございました。

・今年滞りなし初念仏会

(一月十七日)

昨年は住職の病気で実施できなかつた初念仏会ですが、今年法然上人の『一枚起請文』について住職がお話しし、昔ながらの法要が行われました。

・住職、おじいちゃんに

(三月二日)

副住職夫妻に女の子が誕生しました。名前は和蓮です。

編集後記

病院から帰ってまだ数日。いろいろとたいへんなことばかりですが、すやすやと眠るわが子を見ていると、いとおいしい気持ちでいっぱいになります。

副住職が赤ちゃんのころのアルバムを見てみると、この子とそっくりなところがたくさんあり、ほほえましくなります。彼もこうやって、住職夫妻に育てられてきたんですね。

自分が子どもをもってやると、親がどれだけ苦労して私を育ててくれたか、実感することができ始めたように思います。自分の親孝行が足りなかつたと思わされます。

そういえば、私たちの誰もをいとおしんでくれるのが仏さまです。私がこの子を愛するよりももっと、仏さまは私を愛してくれているですね。

(副住職室 久美英)